

日本と韓国の青少年における不全感と不適応感に関する比較研究

大 城 亘 武

要 旨

不全感とは、心が晴れない、心弾まない、何か屈託がある、といった現象を意味するものとする。フラストレーションないしストレスの感覚といってもよい。

本研究は、アンケート調査によって得られた韓国の中学生772人(男子;421、女子;351)、日本の中学生1158人(男子;616、女子;542)、合計1930人のデータについて検討する。

不適応感として設定した、家出したい、死にたい、人を殴ったり暴れたい、の3項目について日韓間に有意な差が認められた。いずれも韓国の青少年にその比率が高かった。特に「死にたい」は日本の青少年が25%なのに対して韓国の場合は55%となり両国の違いが際立っている。なお、学校をやめたい、の項目には有意差がなかった。

不全感の9項目について主成分分析を施し、3主成分を抽出した。それらは流行遅れ不全感、学習時間不全感、進路決定不全感と解釈された。平均値の差の検定の結果、第1主成分(流行遅れ不全感)スコアでは日本の青少年が有意に高い。第2および第3主成分については韓国の青少年のスコアが有意に高かった。韓国の青少年においては進学・進路問題が不全感となり、日本の青少年の場合は社会や流行に敏感であるようだ。

キーワード：比較研究，不全感，不適応感

はじめに

不全感とは、心が晴れない、心弾まない、何か屈託がある、といった現象を意味するものとする。フラストレーションないしストレスの感覚といってもよい。日常生活の中で、いろいろな葛藤や不適応感が生ずると考えられる。青少年がどのような不全感を持っているか、そのような不全感は何国や文化を超えて共通性があるのか。

本稿の目的は日本と韓国の青少年、特に中学生における不全感、不適応感について比較検討することである。また、重要他者との親近距離と不全感および不適応感との関連についても検討する。

検討される課題はつぎの通りである。

不適応感に日韓差があるか。

不全感に日韓差があるか。

重要他者への親近距離に日韓差があるか。

不適応感と重要他者との親近距離の間の相関に日韓差があるか。

不全感と重要他者との親近距離に日韓差があるか。

方 法

(1) アンケート用紙

中学生の生活実態・行動について調査するために性別、学年、家族構成と31設問項目で構成されるアン

ケート用紙を用いた。本稿では31設問のうち、不全感に関する設問、および不適応感に関する設問の、2設問を中心に分析した。

不適応感に関する設問

あなたは、次のようなことを考えたことがありますか。それぞれの項目ごとにあてはまるところに○をつけてください。

- A. 家出したいと思うこと、
- B. 学校をやめたいと思うこと、
- C. 死にたいと思うこと、
- D. 人をなぐったり、暴れまわりたいと思うこと。

この設問項目への回答は4段階法(1しばしば思う、2ときどき思う、3たまに思う、4思うことはない)とした。ここでは回答の1~3を「ある」、4を「ない」として整理しなおして分析した。

不全感に関する設問

次の項目ごとに、の中に、あなた自身や、あなたがふだん感じたりすることと一致するものがありましたら○、一致しないと思うものには×をつけてください。

- 1. 勉強時間が人よりすくないのではないかと思います。
- 2. テレビを見すぎているのではないかと思います。
- 3. 本を読む量が人より少ないのではないかと思います。

4. 世の中の動きを人より知らないのではないかと思う。
5. 生活がだらしない方ではないかと思う。
6. 流行におくれているのではないかと思う。
7. 自分の家で落ちついて勉強できない。
8. どんな進路に進みたいのか自分でもわからない。
9. 自分の望みどおりの進路に進むのに実力不足ではないかと不安に思う。
10. まだ子どもでいたいと思う。
11. 自分はあまり異性にもてない方だと思う。
12. 私はもう一人前の大人だと思う。

以上のうち、10と12は分析から外した。

親近距離に関する設問

あなたの身近な人 (①親友、②ホームルームの先生、③父、④母) について、例を参考に、自分との親しさの程度を考えながら、目盛り線の上に番号と矢印を記入してください。

回答は「自分」を基点して11cmの線分上に重要他人の相対位置を記入させる方法を採用した。

(2) 調査対象

日本および韓国の中学生男女を調査対象とした。日本では沖縄県浦添市、韓国では大邱市を任意に調査地とした。回収率は調査時の欠席者を除き、100%である。分析に使用された被験者の内訳は表1の通りである。

表1 被験者内訳

	日本	韓国	合計
男子	616	421	1037
女子	542	351	893
合計	1158	772	1930

(3) 調査の実施

調査は2003年11月に行われた。調査は集団法により、各学校の各学級担任の教師により実施された。調査の実施に先立ち、この調査の趣旨を説明し、無記名方式であり、学業成績と関係しないこと、プライバシーは保護されることが強調された。

(4) データの処理

データは、統計分析パッケージSPSS For Windowsで処理された。

結 果

1 不適応感の日韓比較

(1) 家出したいと思うこと

日韓全体としては、約60%が、「家出したい」と思

うことがある、と回答している。「家出したい」に対する日韓の出現比率に有意な差が検出された ($\chi^2=10.433$, $df=1$, $p=.0001$)。日本では「ない」が有意に多く、韓国では「ある」が有意に多い (表2参照)。

表2 家出したいと思うこと

クロス表

			国		合計
			日本	韓国	
家出	ない	度数	495	279	774
		国の%	43.5%	36.1%	40.5%
調査済みの残差		3.2	-3.2		
ある	度数	642	493	1135	
	国の%	56.5%	63.9%	59.5%	
	調査済みの残差	-3.2	3.2		
合計	度数	1137	772	1909	
	国の%	100.0%	100.0%	100.0%	

$\chi^2=10.433$, $df=1$, $p=.001$

(2) 学校をやめたいと思うこと

日韓全体としては、約52%が、「学校をやめたい」と思うことがある、と回答している。 χ^2 検定の結果は有意でなかった ($\chi^2=0.965$, $df=1$, $p=0.326$)。 (表3参照)

表3 学校をやめたいと思うこと

クロス表

			国		合計
			日本	韓国	
退学	ない	度数	565	363	928
		国の%	49.4%	47.1%	48.5%
調査済みの残差		1.0	-1.0		
ある	度数	578	407	985	
	国の%	50.6%	52.9%	51.5%	
	調査済みの残差	-1.0	1.0		
合計	度数	1143	770	1913	
	国の%	100.0%	100.0%	100.0%	

$\chi^2=0.965$, $df=1$, $p=.326$

(3) 死にたいと思うこと

日韓全体としては約38%の者が「ある」と回答している。 χ^2 検定の結果、国との連関は有意であった ($\chi^2=175.515$, $df=1$, $p=0.000$)。日本は有意に「ある」が少なく、韓国は有意に「ない」が少ない。(表4参照)

表4 死にたいと思うこと

クロス表

			国		合計
			日本	韓国	
死にたい	ない	度数	851	344	1195
		国の%	74.5%	44.6%	62.5%
調査済みの残差		13.2	-13.2		
ある	度数	291	427	718	
	国の%	25.5%	55.4%	37.5%	
	調査済みの残差	-13.2	13.2		
合計	度数	1142	771	1913	
	国の%	100.0%	100.0%	100.0%	

$\chi^2=175.515$, $df=1$, $p=.000$

(4) 人をなぐったり、暴れまわったりしたいと思うこと

暴れまわりたいと思うと回答した者の比率は、日韓全体として約56%ある。 χ^2 検定の結果は有意であった($\chi^2=76.787$, $df=1$, $p=0.000$)。日本では「ある」が有意に少なく、韓国では有意に「ある」が多い(表5参照)。

表5 人をなぐったり、暴れまわったりしたい、と思うこと
クロス表

			国		合計
			日本	韓国	
暴れたい	ない	度数	600	248	848
		国の%	52.4%	32.2%	44.3%
	調査済みの残差		8.8	-8.8	
	ある	度数	544	523	1067
国の%		47.6%	67.8%	55.7%	
調査済みの残差		-8.8	8.8		
合計		度数	1144	771	1915
		国の%	100.0%	100.0%	100.0%

$\chi^2=76.787$, $df=1$, $p=0.000$

2 不全感の日韓比較

表6から表15に、国と不全感項目のクロス表と、国ごとの回答(ない、ある)の実数、その比率、調整済み残差、および χ^2 検定の結果を掲げた。

不全感各項目への回答比率に有意な差異があるかを見ると、10項目中9項目で有意差が認められ、1項目で有意な差異のないことが検出された。

日本の中学生において韓国の中学生より有意に不全感を訴える者の比率が高い項目を次に掲げる。

- 勉強時間が人より少ないのではないかと
- 世の中の動きを人より知らないのではないかと
- 生活がだらしないのではないかと
- 流行に遅れているのではないかと
- 異性にもてないと思う

韓国の中学生において日本の中学生より有意に不全感を訴える者の比率が高い項目を次に掲げる。

- テレビを見すぎているのではないかと
- 本を読む量が人より少ないのではないかと
- 家で落ちついて勉強できない
- 進みたい進路がわからない

日韓差が認められなかった項目は「自分の望みどおりの進路に進むのに実力不足ではないかと不安になる」であった。

表6 勉強時間がひとより少ないのではないかと
クロス表

			国		合計
			日本	韓国	
暴れたい	ない	度数	215	172	387
		国の%	18.6%	22.3%	20.1%
	調査済みの残差		-2.0	2.0	
	ある	度数	943	600	1543
国の%		81.4%	77.7%	79.9%	
調査済みの残差		2.0	-2.0		
合計		度数	1158	772	1930
		国の%	100.0%	100.0%	100.0%

$\chi^2=3.984$, $df=1$, $p=.046$

表7 テレビを見すぎているのではないかと
クロス表

			国		合計
			日本	韓国	
テレビ	ない	度数	656	314	970
		国の%	56.6%	40.7%	50.3%
	調査済みの残差		6.9	-6.9	
	ある	度数	502	458	960
国の%		43.4%	59.3%	49.7%	
調査済みの残差		-6.9	6.9		
合計		度数	1158	772	1930
		国の%	100.0%	100.0%	100.0%

$\chi^2=47.290$, $df=1$, $p=.000$

表8 本を読む量が人より少ないのではないかと
クロス表

			国		合計
			日本	韓国	
読書	ない	度数	512	230	742
		国の%	44.2%	29.8%	38.4%
	調査済みの残差		6.4	-6.4	
	ある	度数	646	542	1188
国の%		55.8%	70.2%	61.6%	
調査済みの残差		-6.4	6.4		
合計		度数	1158	772	1930
		国の%	100.0%	100.0%	100.0%

$\chi^2=47.290$, $df=1$, $p=.000$

表9 世の中の動きを人より知らないのではないかと
クロス表

			国		合計
			日本	韓国	
世の中の	ない	度数	568	423	991
		国の%	49.1%	54.8%	51.3%
	調査済みの残差		-2.5	2.5	
	ある	度数	590	349	939
国の%		50.9%	45.2%	48.7%	
調査済みの残差		2.5	-2.5		
合計		度数	1158	772	1930
		国の%	100.0%	100.0%	100.0%

$\chi^2=6.115$, $df=1$, $p=.013$

表10 生活がだらしがないのではないか
クロス表

			国		合計
			日本	韓国	
生活	ない	度数	566	433	999
		国の%	48.9%	56.1%	51.8%
		調査済みの残差	-3.1	3.1	
	ある	度数	592	339	931
		国の%	51.1%	43.9%	48.2%
		調査済みの残差	3.1	-3.1	
合計		度数	1158	772	1930
		国の%	100.0%	100.0%	100.0%

$\chi^2=9.645$, $df=1$, $p=.002$

表14 希望の進路に実力不足
クロス表

			国		合計
			日本	韓国	
実力不足	ない	度数	277	197	474
		国の%	23.9%	25.5%	24.6%
		調査済みの残差	-.8	.8	
	ある	度数	881	575	1456
		国の%	76.1%	74.5%	75.4%
		調査済みの残差	.8	-.8	
合計		度数	1158	772	1930
		国の%	100.0%	100.0%	100.0%

$\chi^2=0.638$, $df=1$, $p=.424$

表11 流行に遅れているのではないか
クロス表

			国		合計
			日本	韓国	
流行遅れ	ない	度数	616	464	1080
		国の%	53.2%	60.1%	56.0%
		調査済みの残差	-3.0	3.0	
	ある	度数	542	308	850
		国の%	46.8%	39.9%	44.0%
		調査済みの残差	3.0	-3.0	
合計		度数	1158	772	1930
		国の%	100.0%	100.0%	100.0%

$\chi^2=8.970$, $df=1$, $p=.003$

表15 異性にもてない方だと思う
クロス表

			国		合計
			日本	韓国	
異性	ない	度数	210	242	452
		国の%	18.1%	31.3%	23.4%
		調査済みの残差	-6.7	6.7	
	ある	度数	948	530	1478
		国の%	81.9%	68.7%	76.6%
		調査済みの残差	6.7	-6.7	
合計		度数	1158	772	1930
		国の%	100.0%	100.0%	100.0%

$\chi^2=45.085$, $df=1$, $p=.000$

表12 家で落ち着いて勉強できない
クロス表

			国		合計
			日本	韓国	
落ち着けない	ない	度数	692	293	985
		国の%	59.8%	38.0%	51.0%
		調査済みの残差	9.4	-9.4	
	ある	度数	466	479	945
		国の%	40.2%	62.0%	49.0%
		調査済みの残差	-9.4	9.4	
合計		度数	1158	772	1930
		国の%	100.0%	100.0%	100.0%

$\chi^2=88.129$, $df=1$, $p=.000$

表13 進みたい進路がわからない
クロス表

			国		合計
			日本	韓国	
進路	ない	度数	656	343	999
		国の%	56.6%	44.4%	51.8%
		調査済みの残差	5.3	-5.3	
	ある	度数	502	429	931
		国の%	43.4%	55.6%	48.2%
		調査済みの残差	-5.3	5.3	
合計		度数	1158	772	1930
		国の%	100.0%	100.0%	100.0%

$\chi^2=27.699$, $df=1$, $p=.000$

3 不全感項目の主成分分析

不全感項目12項目のうち、「異性にもてないと思う」「子どもでいたい」「もう大人だ」を除く9項目への反応に基づいて、主成分分析を施した。ついでバリマックス法により回転を施した。回転後の成分負荷量は表16に示した(表16参照)。

表16 回転後の成分行列

不全感項目	成分1	成分2	成分3
流行遅れ	0.793	-0.013	0.025
世の中の動き知らない	0.749	0.030	0.126
生活がだらしがない	0.540	0.315	0.079
テレビ見すぎ	-0.017	0.778	0.021
勉強時間少ない	0.157	0.632	0.004
読書少ない	0.060	0.441	0.231
進路わからない	0.178	-0.082	0.734
家で落ち着けない	-0.105	0.221	0.718
進路に実力不足	0.293	0.125	0.389
成分平方和	1.639	1.371	1.282
寄与率	18.210	15.220	14.220
累積寄与率	18.210	33.430	47.680

第1成分は、「流行に遅れているのではないか」「世の中の動き知らないのではないか」に高い負荷があるので「流行遅れ不全感」と解釈された。

第2成分は、「テレビを見すぎ」「勉強時間少ない」「読書少ない」の不全感項目に高い負荷があるので

「勉強時間不全感」と解釈された。

第3成分は、「進路わからない」「進路に実力不足」の各項目に高い負荷が認められたので「進路決定不全感」と解釈された。

4 不全感スコアによる日韓比較

各成分スコアによって日韓比較を行う。平均値の差の検定（t検定）の結果は表17に掲げたとおりである（表17参照のこと）。

表17 不全感スコアの平均値の日韓比較
(上欄：平均値、下欄：標準偏差)

	日本	韓国	t 値	p
流行遅れ不全感	0.123	-0.185	6.699	0.000
	0.996	0.977		
勉強時間不全感	-0.089	0.133	-4.777	0.000
	0.971	1.028		
進路決定不全感	-0.175	0.263	-9.535	0.000
	0.951	1.014		

流行遅れ不全感スコアについてのt検定の結果、日韓差は有意であり、日本>韓国であった。流行遅れに関しては日本の中学生の不全感が韓国中学生の不全感よりも高い。

勉強時間不全感スコアについてのt検定の結果、日韓差は有意であり、韓国>日本であった。韓国の中学生の学習時間不全感スコアは日本の中学生のスコアより有意に高い。

進路決定不全感スコアのt検定の結果、日韓差は有意であり、韓国>日本であった。進路決定不全感スコアは韓国中学生の方が日本の中学生よりも高い。

5 重要他者 (Significant Others) との親近距離

重要他者として、父、母、親友、ホームルーム (HR) の先生、を設定し、直線上に自分からのこれらの重要な他者への心理的距離を位置づけさせた。「自分」からの距離を親近距離とした。距離が短いほど親密であることになる。親近距離について、重要他者 (4水準) × 国 (2水準) のモデルによる分散分析の結果、被験者内効果のうち重要他者の主効果は有意であった (F=1983509, df=2.72, p=0.000)。重要他者と国の交互作用も有意であった (F=16530.079, df=2.72, p=0.000)。被験者間効果 (国の主効果) もまた、有意であった (F=16530.079, df=2.72, p=0.000)。親近距離は日本が韓国より大きい。すなわち日本の青少年

の重要他者との親密さは韓国のそれよりも薄いということである。ただし、親友に対する親近距離は日韓間に有意な差異は認められない。また、重要他者それぞれに対する親近距離は日韓を問わず、ホームルームの先生>父>母>親友となった (図1参照)。

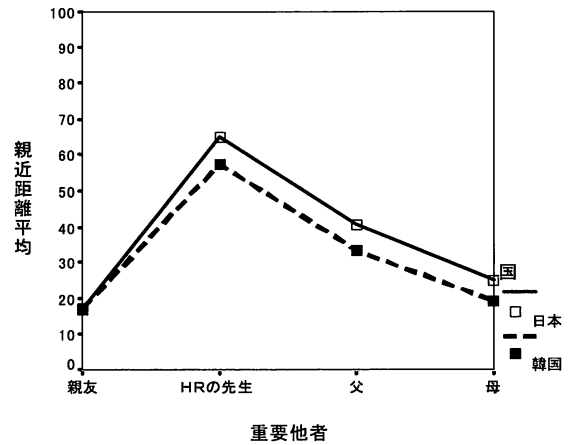


図1 親近距離の日韓比較 (重要他者別)

6 重要他者 (Significant Others) と不適応感

不適応感項目 (4種) ごとに、国の要因を加えて親近距離の分析を行ったところ、国の主効果は重要他者が親友である場合を除き、すべて有意であり、国と不適応要因の交互作用はすべて有意でなかった (分析表は割愛した)。以下では、不全感要因 (不全感の有無) について親近距離の比較を行う。

6.1 「家出したい」と親近距離 (表18A)

どの重要他者との親近距離についても「家出したい」の効果は全て有意であった。「有」>「無」となっている。家出したいについて不適応感を持つものほど親近距離が遠い。

表18A 家出の有無と親近距離

	家出	N	平均値	標準偏差	t	p
親友	ない	741	18.9	17.2	3.481	0.001
	ある	1100	16.2	15.9		
HRの先生	ない	724	58.6	26.5	-4.193	0.000
	ある	1084	63.9	26.3		
父	ない	715	30.0	25.8	-9.622	0.000
	ある	1082	42.5	29.0		
母	ない	722	18.4	19.2	-7.042	0.000
	ある	1087	25.5	23.4		

6.2 「学校やめたい」と親近距離 (表18B)

親友に対しての親近距離は、「学校やめたい」の有無に関わりがなかった。ホームルームの先生、父、母

に対する親近距離は、「学校やめたい」の有無で有意な差があり、「有」>「無」であった。

表18B 学校やめたいの有無と親近距離

	退学	N	平均値	標準偏差	t	p
親友	ない	886	17.8	16.8	1.415	0.184
	ある	958	16.7	16.1		
H Rの先生	ない	868	56.5	25.9	-8.256	0.000
	ある	945	66.6	26.1		
父	ない	861	32.6	26.3	-7.172	0.000
	ある	938	42.0	29.5		
母	ない	870	20.2	20.1	-4.705	0.000
	ある	943	25.0	23.4		

6.3 「死にたい」と親近距離 (表18C)

親友に対しては、「死にたい」の有無の効果は有意でなかった。親友以外の重要他者すなわち、ホームルームの先生、父、母への親近距離は、「死にたい」の効果は有意であり、「有」>「無」、であった。

表18C 死にたいの有無と親近距離

	死にたい	N	平均値	標準偏差	t	p
親友	ない	1151	17.3	16.3	0.234	0.815
	ある	692	17.1	16.7		
H Rの先生	ない	1131	61.0	27.2	-1.713	0.087
	ある	680	63.2	25.1		
父	ない	1121	33.7	27.2	-7.075	0.000
	ある	678	43.5	29.1		
母	ない	1130	21.2	21.0	-3.684	0.000
	ある	682	25.2	23.6		

6.4 「暴れまわりたい」と親近距離 (表18D)

親友に対しては、「暴れまわりたい」の主効果は有意でなかった。ホームルームの先生、父、母への親近距離は、「暴れまわりたい」の主効果は有意であり、「有」>「無」であった。

表18D 暴れまわりたいの有無と親近距離

	暴れたい	N	平均値	標準偏差	t	p
親友	ない	810	17.2	16.4	-0.056	0.955
	ある	1033	17.2	16.5		
H Rの先生	ない	791	58.6	26.1	-4.631	0.000
	ある	1022	64.4	26.6		
父	ない	785	35.2	27.6	-2.943	0.003
	ある	1015	39.2	28.9		
母	ない	792	20.4	20.7	-3.695	0.000
	ある	1020	24.2	22.8		

7 不全感スコアと親近距離

日韓別に不全感スコアと重要他者との親近距離の相関を求めた (表19参照)。

表19 不全感スコアと親近距離の相関

		(上欄：相関係数 下欄：有意水準)		
		流行	勉強時間	進路
親友	日本	0.055	0.016	-0.029
		0.067	0.592	0.336
	韓国	0.067	-0.077	-0.071
		0.071	0.036	0.053
H Rの先生	日本	0.041	0.043	0.052
		0.171	0.151	0.086
	韓国	-0.031	0.042	0.106
		0.406	0.259	0.004
父	日本	0.036	0.023	0.134
		0.233	0.451	0.000
	韓国	0.089	-0.070	0.126
		0.017	0.060	0.001
母	日本	-0.081	-0.045	0.167
		0.541	0.136	0.000
	韓国	0.011	-0.088	0.167
		0.769	0.018	0.000

親友との親近距離は、韓国において勉強時間不全感スコアとの間にのみ有意な相関があった。

ホームルームの先生との親近距離は韓国において進路決定不全感スコアとの間にのみ有意な相関があった。

父との親近距離は、日韓いずれにおいても進路決定不全感スコアと有意な相関が見出された。

母との親近距離は、日韓いずれにおいても進路決定不全感スコアと有意な相関が見出された。勉強時間不全感スコアとの相関が韓国においてのみ有意であった。

考 察

不適応感項目として設定した4項目のうち、「家出」「死にたい」「暴れまわりたい」の3項目で日韓差が認められた。不適応感の出現比率は、日本の中学生において韓国の中学生におけるより少なかった。すなわち韓国の青少年は日本の青少年より不適応感が高いことが示唆される。このうち、「死にたい」の比率が日韓で大きな違いを示している。すなわち、「死にたいと思う」の出現比率は日本で25.5%、韓国で55.4%となっている。その原因が何であるかは、本調査からは明らかにされない。

なお、学校やめたいとする学校不適応感については日韓差が認められなかった。日韓いずれの国においても50%を超える比率となっており、学校からの逃走ないし離脱の様相がくすぶっているように考えられる。

不全感に関しては、日本の中学生は、生活領域全般

に不全感を示しているが、とりわけ「世の中の動き知らない」「流行に遅れている」等、自己の外部との関係性に敏感な様相である。韓国の中学生の不全感は、テレビを見すぎ、本を読む量、進路など自分自身へ向かっている。日韓で大きな差異を示した不全感項目は「家で落ち着いて勉強できない」であった。日本の中学生における出現比率は40.2%であるのに対し、韓国では62.0%となっている。家庭が「居場所」としての機能不全に陥っているのであろうか。

不全感項目について、主成分分析により3主成分を抽出した。それらは「流行遅れ」不全感、「勉強時間」不全感、「進路決定」不全感と解釈された。この主成分をもとに日韓比較を行ったところ、流行遅れ不全感のスコアは韓国の中学生より日本の中学生が高く、勉強時間不全感スコア、進路決定不全感スコアにおいては韓国の中学生が高い値を示した。日本の中学生は流行に高い関心を示し、そこに不全を感じている。一方韓国の中学生は勉強や進路など自己実現やキャリア形成の領域で焦慮しているように考えられる。

親友、ホームルームの先生、父、母の4人の重要他者への親近距離についての日韓比較によると、親友との親近距離に日韓差はなく、他の重要他者においては、全て日韓差があり、日本の中学生の親近距離は韓国の中学生より長かった。また、親友<母<父<ホームルームの先生の順で親近距離が短い。この順位に日韓差はなかった。

不適応感を基にした重要他者との親近距離は、不適応感の有る方の距離が長かった。すなわち、不適応感のある者の親近距離はそうでないものよりも長かった。不適応感を持つ者の重要他者との親密度はそうでない者よりも薄いということである。ただし重要他者が親友の場合は特異である。家出については親友との親近距離は家出不適応感をもたない者の方が長かった。つまりこの不適応感を持たない者は親友との親密度が薄いということである。また、「学校やめたい」「死にたい」「暴れまわりたい」の有無は親友との親近距離に違いを見せなかった。一般に不適応感を有する者は、重要他者との親密度が薄いと考えられるが、こと親友についてはこの考えは当てはまらないようである。

重要他者と不全感スコアとの相関は、日韓によりいくらかの差異が認められた。日韓それぞれにおいて重要他者(4者)と不全感スコア(3種)の総計12組

(4×3)の相関関係を求めた。日本の中学生においては有意な相関が2組において、有意な傾向が2組において、認められた。また、韓国の中学生においては有意な相関が5組において、有意な傾向が3組において、認められた。不全感スコアと親近距離の関連は韓国においてより強いようである。もっとも統計的には有意な相関ではあるものの、相関値自体は極めて小さい。

不全感スコアと親近距離の相関が有意になったのは進路決定不全感において顕著であった。特に父、および母が重要他者である場合に日韓とも有意な相関を示している。進路決定において父および母との関連の強さを示唆するものである。日韓の相関の強さには差異は認められない。

不全感、不適応感についていくらかの日韓の差異が認められた。しかし、本稿の分析で使用されたデータは、いわゆるナショナル・データではなく日韓両国をそれぞれ代表しているとは言いがたい。したがって、本稿で示された結果は過度に一般化されるべきではない。

付記

1. 本研究は中村完(琉球大学法文学部教授)を代表とする青少年適応行動研究会のプロジェクトの一部である。
2. 本研究の調査にご協力いただいた日本、および韓国の中学校の校長および教諭、そしてアンケートに回答いただいた生徒の皆さんにお礼申し上げます。
3. 本研究の一部は、「2006年国際サイコセラピー会議イン・ジャパン」および「第3回アジア国際サイコセラピー会議」(於東京)において、ポスター発表した。
4. ポスター発表のための英文原稿作成に浜川仁先生およびダニエル・プロウディ先生(沖縄キリスト教短期大学・人文学部)のご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。

参考・引用文献

- 中村 完・大城亘武 2002 「青少年の生活意識の構造に関する研究(1)」『日本心理学会第66回大会発表論文集』、p.142.
- 大城亘武、他 2006 「中学生における生活不全感」『沖縄キリスト教短期大学紀要』第34号、p.p.29-41.
- 大城亘武、他 2005 「韓国の中学生：日常生活意識に関する調査研究」『沖縄キリスト教短期大学紀要』第33号、p.p.17-39.
- 大城亘武、他 2001 「中学生における日常生活意識の構造；2」『沖縄キリスト教短期大学紀要』第30号、p.p.279-301.
- 千石 保・鐘ヶ江晴彦・佐藤邦衛 1988『日本の中学生』日本放送出版会。

A Comparative Study of the Sense of Inadequacy and Maladjustment Found among Young Japanese and Koreans

Yoshitake Oshiro

ABSTRACT

This paper discusses feelings of inadequacy in terms of general unhappiness, depression or weariness. It can be said that this sense of inadequacy is a form of frustration or a sign of stress.

The present research examines data from a total of 1930 individuals among whom 772 were Korean junior high school students (421 boys and 351 girls) and 1158 were Japanese junior high school students (616 boys and 542 girls).

To uncover any indications of maladjustment, the researcher asked students to respond to the following four statements: (a) I wish to run away from home; (b) I want to quit school; (c) I want to die; and (d) I wish to beat someone or commit some act of violence. Between young Japanese and Koreans, the results show a statistically-significant difference in their responses. To each of these items, Koreans showed a higher rate of maladjustment. This was especially the case with the third item, "I want to die." Fifty-five percent of Korean respondents answered in the affirmative compared to only 25 percent of Japanese. The item "I want to quit school," however, showed no significant difference.

Of the nine items outlining the sense of inadequacy, the researcher applied principal component analysis to extract three primary components. In these components, the senses of inadequacy were interpreted as being related to maintaining fashion trends, study hours, and career planning. The examination on the first principal component (weariness about being behind the latest fashion) reveals a statistically significant result, with the Japanese students figuring higher than the Korean. In the second and the third components, the young Koreans scored higher with statistical significance. The Korean youngsters seem to worry more about their academic course and future career, while the Japanese seem more concerned with social mores and the latest fashions.

key words: a comparative study, inadequacy, maladjustment